満州国内の収容所ではパン、野菜、大豆入りの粥食、玉蜀黍に舌づつみし懐かしい思い出となった。

この収容所で約一か月の生活で、どうにか体調は回復し、収容所の責任者から、若し満州国内に知人、兄弟、戦前交際した人などのところに行く希望あれば自由に行ってもよいとの達示があったので、みんな寄り集まって相談しあいそれぞれ出発することになった。真っ先に独身者が出発し、次には妻帯者達が出発した。私は三回目に出発した。共産八路軍に合うと殺されると聞いて、昼間は山中か高粱畑に隠れ、日没になってから動き出す。満鉄関係の人の誘導で大変助かったのだった。

一番に困るのは食べるものである。大根、葱、白菜、玉蜀黍を生のまま齧り、生菜の一切れでも大事にして生命をつないだ。

みんな、日本に帰るまでは、と一同家族のようにして泣いたり、叱ったり、笑ったり励ましあい、食物を見つけては分けあって食べたり、他人の子供を背負いながら助け合って歩き通したが、昭和二十一年十一月一日、無事奉天に着いた。

敗戦の記

宮城県　村上　広三郎

北朝鮮会寧の飛行隊を現地除隊して、満州電々に就職することになった。任地は牡丹江電報電話局。着任したのは、昭和十五年八月十五日。それから四年の間に関特演に際して山下奉文大将が、東満地区総司令官として来任するなど、緊張する状態であったが、反面比較的平穏な日々が続いた。

夢破れたのは、忘れもしない昭和二十年八月九日早暁のことである。非常召集の電話で、社宅の同僚たちと何ごとかと出社、ソ連軍の越境を知ったのである。

情報によれば虎林、虎頭、綏芬河からの通信が途絶え、東安から「これから山に入る。サヨナラ」の悲壮な訣別の通信があったと言い、ソ連軍の怒濤涛の進撃と牡丹江指向が推測された。社内は騒然となり、秘密

書類の焼却、関東軍への協力態勢など計られた。

八月十日、都市防衛隊として一部社員が召集された。この社員たちは後日殆どシベリア送りとなり、祖国の土を踏んだ人はすくないという。

第二次召集は十日夜在郷軍人は軍隊手帳と木銃をもって昭慶小学校に集合というものであったが、一晩待っても兵事部の人が来ないので一応解散となった。あとで社に行き聞くと兵事部と一部会社幹部が敦化へと避難してしまったということで呆然としたものである。

八月十一日正午、ソ連軍の爆撃があった。十二日に至り社員家族の避難が始まった。当時、私の家族は妻と三歳と一歳の男の子であった。彼らを見送った夜、街はゴーストタウンとなり発電所、満鉄倉庫などが炎上し夜空を焦がした。

十三日朝岩田庶務課長ら十四、五人が牡丹江駅に集合した。ハルピン経由で南下しようということである。最終列車だという貨車で、少尉を長とする軍人が十人ほど集まっていた。正午近くになってようやく発車した。

その頃、開拓団員であろう、女の人たちが、大八車に子供や袋を乗せ、髪をふり乱しながら馬を駆して続々と集まってきていた。乗る汽車がないのにと思うと胸が痛むおもいであった。残留孤児はこういう人々から生じたのであろうか。

東満の小京都「横道河子」を過ぎると、どしゃ降りの雨となり、そして街は紅蓮の炎であった。列車はノロノロと十五日の正午過ぎハルピンの一つ手前の「大郎坊」に着いた。

誰ともなしに「日本が降伏した」という。信じられず、岩田課長らとともに機関区にニュースを聞きに行った。阿南陸相の自刃をきき、信じるより外なかった。とにかく南下しようとハルピンに着いたら、南下は日本人は乗せないという。やむなく下車し管理局に赴くと、とりあえず南崗に建築中の電話局の三階に行けと指示され、そこに行った。

コンクリートの上にゴザを敷いただけの場所である。一夜まんじりともしない夜だった。一晩中銃声が

ひびき、家族のことなど思い不安がつのるばかりであった。

ソ連軍が進駐して来たのはそれから数日後であった。そして、ソ連軍から、会社の施設や物品は完全に保持せよと命令があった。附近の日本人家族が暴民に襲われたことなどあったりしたが黙々と耐えるより外なかった。

ソ連軍が進駐してまず武器らしきものは一切取りあげられ、日本人家庭の電話機やラジオの撤去、更に会社所有の物品の撤収などこれらの作業にかり出された。

ハルビンの冬は早い。九月も下旬となると、着のみ着のままの身には耐え難いものがあった。越冬は不可能、南下するより術なしと思っていた矢さき、家族が新京にいるとの情報とチチハル方面からの避難民列車が南下するとの情報が入り、九月二十五日岩田課長らと共に避難列車にもぐり込むことに成功した。

新京には家族が宝清路北辰寮という独身寮に住んでいた。妻らは南下の途中に徳恵駅でソ連兵に持ち物や有り金全部を奪われヘトヘトになって新京に着いたのは九月三十日だったという。

妻は二人の幼児とともに街頭で中国人のパン売りを手伝っていた。コンクリートの破片を枕に眠っている長男の姿に涙したことは今も忘れられない。

収入のみちを閉ざされた者にとって手っ取り早い収入のみちは肉体労働である。早朝から中国人街の橋のたもとに立ちん坊して雇い主を待つ生活が始まった。最初の仕事は、煉瓦はがしであった。空家になった日本人の家に梯子をかけて金槌でコンクリートをはがし、傍の板で滑り降ろす。

下の一人がこれを受けるという作業を交代でやる。上にいる者の寒さといったら並大抵のものではない。耐え切れず二日でお手上げしてしまった。次に雇われたのは佐官屋であった。これも長続きせずやめてしまった。当時の日給は昼食つきで三十元だったように思う。

祖国への帰還命令が出た途端に近所にコレラ患者が発生。帰還が一時中止となり、働きにも出られず、用

意した金は食いつぶしに当てるより外なく閉口したものである。

幸い、家族四人祖国の土を踏むことができたが、もう戦争はコリゴリである。

悲惨であった満州の終末

山形県　阿部とみ

広漠千里の地平線の彼方に沈む真紅の美しい落陽、忘れがたい大陸慕情になります。二十八歳の若さで夫に急死された私は途方にくれる暇もないまま、当時満州の吉林市で師導大学で教鞭も取っていた従兄弟を頼って昭和十三年七月下関港から出港しました。実家の母に二人の子どもを託しての渡満でした。あの満州で悲惨な運命をたどるとは夢想だにしない渡満。吉林ではわずかの期間をすごし、知己の人の紹介で四平街の満州油化公司の責任者であった老夫婦の家で住み込みの家事全般をする仕事につきました。

やがて航空燃料の補給対策から石炭の液化工場として昭和十六年五月に陸軍燃料廠の満州四平製造廠として接収され、工科系の大学卒の独身の技術将校たちの面倒をみさせてもらいました。十八年十一月には長男も中等教育を終えて同廠の軍属として就職しました。四平街は中満の小都市ですが、連京線をはじめ交通の要衝でもあったので、関東軍の中枢機能をもった軍都でもありました。

二十年四月頃から夕暮の四平駅に散歩に出た息子が、停車しても黙々として語らない大量の兵員を南下させる兵員輸送列車を目撃し、南方戦線の風雲急を告げる事態にあることを囁いていたようでした。

同居していた電気系の技術将校も自製の超短波の受信機で外国放送を傍受しては暗雲の中にあることを察知していたようです。息子も工廠の引込線には松根油を採る松の根が山積みされているのを見ては航空燃料の枯渇を知ったようです。機密のきびしい軍規の中で、ただ平然を装うみたいでした。

七月に入ると、根こそぎ動員された一般民間人が、